

1 受賞団体・個人の名称

うおずみのうえん

魚住農園 (茨城県石岡市)

(問い合わせ先)

0299-43-6826

(経歴)

昭和49年、有機農業の取組み開始。55年に独立、農園を開設。

平成19年、日本有機農業研究会有機農業推進委員会委員長に就任。

シンポジウムのパネラーや研修会講師を数多く務め、有機農業の普及啓発に幅広く活躍している。

(受賞時の経営内容)

米・野菜類・小麦・大豆等 3ha、養鶏 600羽



2 生産面の取組

①土づくり

- ・循環的な自給生産が可能なモミガラ、落葉、雑草、野菜残渣入りの鶏糞堆肥やボカシ肥を使用。
- ・約80~100品目の野菜等を生産し、輪作をしながら土壌の肥沃度を向上させている。



②病害虫防除の工夫

- ・(耕種的防除)雑草対策に管理機・刈払機等による畦間の除草。
- ・(物理的防除)対病気用に雨除けハウス(トマト)。対雑草用に黒ポリ、小麦・稲ワラマルチ。対害虫用に育苗時のみサンサンネット・パスライトをトンネルで被覆等。
- ・(生物的防除)果菜類等の畦間にクズ小麦の全面ばらまきによりリビングマルチ。水田除草対策に野鯉を利用。アオムシ対策には天敵の在来寄生蜂を活用し、手での捕虫やネットの被覆はしない。
- ・在来品種等、有機農業に適した種苗の生産・活用。在来品種数種を自家採種。

③リサイクルの実践

- ・地域の落ち葉を活用して踏込温床を作成。できた腐葉土は翌年の床土へ。
- ・鶏の餌には、規格外野菜・外葉・雑草・食品残さや地元の米店からの米糠、地元酒造メーカーからの酒糠等を使用。
- ・自家の鶏糞は、堆肥やボカシ肥として利用。
- ・化学資材によるネット被覆やポリマルチの利用を極力抑えている。

3 経営面の取組

○消費者に直接販売

- ・提携先の消費者(85世帯、2保育所)へ毎週1回宅配。
(供給方法・荷姿は、消費者グループ自身のライトバンで取りに来る、農園の車でコンテナ宅配、段ボール箱による宅配便の3形態。)
- ・野菜の内容・生産状況をニュースレターや直接話をする事で消費者に伝達。

4 取組の成果

①持続的な有機農業の経営確立

- ・生産者と消費者の直接の提携により、3haの家族農業で約120世帯の農産物を供給、安定的に持続。
- ・東日本大震災後、農産物の放射能検査を実施し、結果を含め生産への姿勢を消費者へ伝えている。

②地域農業との連携

- ・毎年1世帯の新規有機農業者を受け入れ。
- ・敷料のモミガラや規格外小麦をエサ用に供給してもらうなど、有機と慣行栽培が共存しており、有機農業者だけでは達成できない部分を補完してもらっている。

5 地域社会への貢献

①消費者等との交流

- ・消費者に「自分たちの農場」という意識を持てるよう、農園での交流を日常的に実施。
イベントとして、夏のジャガイモ掘り、冬の落ち葉集め等を開催。
- ・都市農業公園(東京都足立区)での農業体験教室(平成23年まで)、JA全農いばらきの併設農場での体験指導を実施。
- ・保育園への給食食材提供のほか、農園でのジャガイモ、サツマイモ収穫体験を実施。

②有機農業を推進する取組

- ・有機農業に関する研究会やシンポジウム等で講師やパネラーとして普及啓発・実地指導などを実施。
- ・「森・里・海流域自給提携ネットワーク」により、新たな視点で有機農業の広がりに向けた活動を提案。

③東日本大震災への取組

- ・仲間20~30人及び提携消費者との協力で4月初めから支援活動を開始。現在も福島への支援を継続。
被災地に野菜や卵、衣類を提供。

